資料

令和元年度　佐賀県立有田工業高等学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
平和で民主的な社会の形成者として、個性豊かで人間愛に満ち、国際的視野に立って社会に貢献できる、心身ともに健全な人間を育成する。 ・地域を愛し、地域から愛される有工生を育て、地域に根ざした学校として更なる発展を目指す。 ・学力の向上を目指し、部活動にも取り組む、光り輝く有工生を育てる。 ・高い志を持ち続けるチャレンジ精神豊かな有工生を育てる。	①挨拶、服装、マナー指導の徹底と思いやりの心の醸成 ②進路保障に繋ぐ意欲的な学力向上と資格取得 ③志をもった部活動と生徒会活動の展開を図るとともに業務改善を進める ④保護者、地域、産業界との連携強化と特色ある教育の推進 ⑤5S運動（整理　整頓　清潔　清掃　躾）とUDの推進 ⑥高校魅力づくりの推進

達成度　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3　目標・評価

①挨拶、服装、マナー指導の徹底と思いやりの心の醸成

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育（社会規範定着マナー向上）	基本的生活習慣の向上	生命を大切にする心や他人を思いやる心、善悪の判断など、規範意識の向上と道徳性を身につけさせる。	・校則を遵守させ、自己管理能力を身につけさせる。 ・生徒一人ひとりが自ら考え、他の生徒たちと議論を交わす力など、コミュニケーション能力を育てる。	B	昨年度よりは生徒の落ち着きが見られ、問題行動も激減している。頭髪服装検査や列車乗車指導、SNSの利用については機会あるごとに注意喚起したが、指導事例が1，2件発生した。	常日頃から生徒と関わりを持つ中で、挨拶や身だしなみについて指導をしていく。SNSについても、集会時に注意点がまとめてあるプリント等を配布し、回数を重ねたが、今後はより具体的な内容や生徒自身が考える時間を増やしたい。
	●いじめ問題への対応	早期発見、実態把握に向けた全国的な体制の推進	いじめがなく、全生徒が安全に安心して生活を送れるような学校づくりを目指す。	・学校生活アンケート（いじめに関する）を実施し、記載内容に基づき速やかに対応する。 ・授業開始2分前には教師が教室に臨み、生徒の様子や実態を把握するように努める。 ・職員同士の情報交換を行いながら、共通理解・共通指導を行う。	B	アンケートを毎月実施することで、いじめについて考える時間を作り、生徒たちのいじめに関する意識が高まった。そのなかでも、数件のいじめが発生したが、早期発見・早期対応することで重大化することはなかった。教員間の連携をさらに高め、全職員での見守り、関わりをしなければならないと感じた。	毎月のアンケートは、未然防止・早期発見に有効であると感じている。今後は、アンケートに加え、学年団との連携を強め、さらなる早期発見に努めたい。
	○人権・同和教育	人権・同和教育の推進	いじめや性差別などさまざまな人権問題に対する視野を広げ、人間愛に満ちた生徒の育成を目指す。	・6月の「人権学習・進路保障ホームルーム」を他校の参考となるような、内容の充実した公開授業とする。・すべての教職員が校内研修はもとより、校外での研修会に積極的に参加して人権感覚を磨く。 ・違反質問等に対し、その差別性を見抜き指摘できるような進路保障体制を築く。	A	・伊西地区の事務局校として、「人権学習・進路保障ホームルーム」公開授業の事前準備を進め、他校に参考を示すことができた。 ・講演会は、「自分に関わりのあることとして真剣に聴くことができたか」の質問に対して97.9%が肯定的な回答であった。 ・児童生徒支援教員の加配により、職員研修が充実した。	・公開授業は次年度まで続くので、本年度の反省を踏まえ、他校の参考になるよう、より充実した内容が求められる。 ・引き続き職員研修を充実させることで、広く人権への認識を深め、安全に安心して生徒が学べる教育環境づくりと、いじめ事案等の未然防止に努めたい。

②進路保障に繋ぐ意欲的な学力向上と資格取得

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	図書館利用の推進	生徒一人当たりの貸し出し冊数7冊を目指す。	・朝読書を通して、生徒の図書館利用を促す。 ・図書館だよりで生徒のおすすめの本を紹介し、生徒の読書意欲を喚起する。 ・図書館のレイアウトを変更することによって、より足を運びやすい環境を作る。	B	・貸出冊数は生徒一人当たり約4冊で、前年度より減少した。 ・朝読書の取り組みはよく、図書館だよりも定期的に発行し、生徒おすすめのポップ作りをするなど取り組んだ。	・生徒が図書館へ足を運びやすい新しい仕掛け作りを行う。 ・ポップ作りは生徒に好評だったので、来年度も続けて行う。 ・授業でも図書室を有効活用してもらう。
		学習習慣の定着 授業への取りくみ姿勢の向上	各学期の追認指導科目数を昨年比で20%減らす 基礎力テストへの取り組み強化 授業改善と指導力向上に取り組む	・適切な課題配付をおこなうとともに、未提出者の指導を徹底する。 ・クラス、学年、授業担当等から基礎力テストを頻繁に話題にすることで、意識づけとする。 ・家庭学習時間確保のため、各方面で帰宅時間に配慮をする。 ・定期考査にあたり、学習計画をしっかり立てさせる指導をおこなう。 ・授業に関するアンケートを行い、教員、生徒ともに改善の一助とする。	B	・追認指導科目数昨年比で延べ数317→266（約16%減）であったが、実人数152→151とほぼ同数。1人で複数科目の追指導を受ける者は減少したが、指導対象人数を減らすことができなかった。 ・基礎力テストについては、プロV参加者昨年比ほぼ同数、平均9点以上約2割減少。クラスにより取組状況および結果に差があり、熱心に指導にあたる担任もいたが、学年や全校的盛り上がりを作れなかった。 ・定期考査に対する指導は各学年で通年、計画的に実施された。 ・相互授業参観実施は、得るものがあると思うので、今後も続けていきたい。 ・授業アンケートについては、実施も含め再考したい。	・不得意科目については、定期考査直前の指導だけでなく、教科担当者が日々の授業等においてしっかり把握・指導することで、欠点科目をさらに減らすことができると考える。 ・基礎力テストの実施にあたっては、学年やクラスでの取り組みに温度差が出ないように教務部で主導したい。 ・相互授業参観、授業アンケートは、実施方法を検討し、充実したものにする。 ・家庭学習時間確保について、各方面の協力をさらに進める方策を練る。
	○進路保障	進路保障	2学期末までに、就職内定率・進学合格率の100%を達成する。	・進路対策補習や模擬面接の実施により、基礎学力の向上と面接対応力の向上を図り、第一次選考での合格率90%を達成する。 ・生徒に過去の受験報告書を用いて、受験のための対策を練らせ、目標達成のための努力を継続させる。 ・早期の離職を防ぐため、職場見学や職場調べにより、就職のミスマッチを防ぐ。	B	・就職の第一次選考の合格率は、90.2%で目標を達成することができた。一部の生徒について、単位習得が遅れて就職活動が遅くなった。 ・応募前職場見学には107名が参加し、就職者の約8割が職場を直接見学して就職先を決めることができた。 ・進学については、1名四年制大学に不合格であったが、同系列の短大に合格した。その他の大学・短大・専門学校については全員合格することができた。	・3年生の単位習得・卒業見込みについて、学年団および3年で授業をする職員に周知する必要がある。3年生自身にも1学期での卒業見込み確定について、しっかり自覚させる。 ・進路に3年担任が2名いた。最も忙しい就職書類作成、面接指導の時、担任は自分のクラスの指導に忙しいため、残った進路のメンバーが超多忙になった。次年度は、進路メンバーに3年担任ができるだけ入らないようにしたい。
	●志を高める教育	資格取得	ジュニアマイスター認定：ゴールド10名、シルバー25名、ブロンズ25名、校内表彰80名以上。3年間で全員が3つ以上の資格を取得する。	・顕彰制度、表彰制度を生徒・保護者・職員へ周知させる。 ・資格取得、コンクール参加を奨励、補習体制の充実	B	ジュニアマイスターとしてゴールド6名、シルバー14名、ブロンズ21名、校内表彰21名と目標には及ばなかった。	資格取得者は多かったが全体的に、ジュニアマイスターの顕彰できるポイントまでは届かず、顕彰者数が減ってしまった。次年度は計画的にポイントが増えるよう進めていきたい。
		進路意識の形成	生徒自身が、自己の進路目標を調査・考察し、具体化して主体的に決定できるようにする。	・「進路のしおり」や「ポートフォリオ」を活用してLHRの充実を図る。 ・進路ガイダンスおよび職員の企業訪問の報告や先輩からの情報を随時生徒に還元し、進路意識の向上を図る。 ・県内企業紹介会や進路報告会を実施し、1・2年生への進路意識を高める。	B	・進路意識を向上させるための行事はすべて予定通り実施することができた。 ・県の企画により、2年生全員が企業説明会に参加した。その後行った進路体験発表会で進路希望調査を行ったが、進路未定の生徒が予想より多かった。 ・年度末に行う県内企業紹介会で進路意識が向上してくれることを期待する。	・3年生の進路に対する取り組みが遅い。4月に進路希望調査を行うが、その後履歴書の作成に取り組むなど、早期に進路に対する意識を持たせる。 ・就職支援員がおこなう「県内企業フォーラム」への参加を促進し、1・2年次から進路への関心を喚起する。 ・求人票の様式が次年度から変更になるため、進路のしおりを大幅改訂する。

③志をもった部活動と生徒会活動の展開

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	部活動・学校行事の活性化	部活動、学校行事に生徒自身が主体的に参加できる環境づくりをする。アンケートを実施し、生徒の達成度80%をめざす。	・学校行事に関しては、昨年のアンケートをもとに、更に充実した内容を検討する。 ・主体的で建設的な生徒の意見を尊重し、行事や部活動に反映する。 ・部活動については、ホームページの部活動ニュースの更新を月に1回行い、情報発信するとともに活性化につなげる。	B	今年度の体育祭、文化祭をはじめとする学校行事では、職員、生徒の意見を取り入れながら、運営することができた。また、来年度以降へつながる意見を多く得ることができた。 部活動の入部率向上や活性化について生徒会でも会議を設けた。課題としては、大会前と試験前のメリハリをもって活動に取り組むことがあげられる。 部活動のニュース更新については、今年も滞ってしまった。	今年からの引継ぎではないが、クラス減に伴う問題に対して、工業化学科、電気科の時を参考に対処策を早めに提示する必要がある。 試合結果だけでなく日ごろの活動自体に視点を向けた指導を推進する。 部活動ニュースについては、写真部などとの協力で、最新情報を更新するよう取り組む。

④保護者、地域、産業界との連携強化と特色ある教育の推進を図るとともに、業務改善を進める

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○開かれた学校づくり	保護者会との連携	PTA総会の出席率85％以上	保護者の興味を引くように授業参観では担任の授業や専門科目を設定し、また、参加しやすい曜日に開催する。クラス評議員の方々にも参加の呼びかけをお願いする。	B	日曜日に開催したが、出席率70％で目標に及ばなかった。出不足金を徴収される地域活動などと競合した可能性も考えられる。	PTA役員等の意見を参考に参加しやすい環境を整える。
		情報発信	ホームページの内容の充実および保護者への浸透。少なくとも週に複数回の更新	・逐次ホームページの情報を更新する。学校案内などとの整合性を保つ。 ・ホームページ管理更新の組織を明確にし、更新人員の拡充を行う。	B	ホームページの責任者を各科明確にした。古い情報を精査し、主なイベントは早めにアップし告知を行った。個人情報などに配慮しながら極力発信した。	今後もホームページの更新を行い、常に新しい情報をアップしていきたい。ただし、情報内容に対し、個人情報等などが含まれていないか注意を要する。
教育活動	○キャリア教育支援	キャリア教育の充実	キャリア教育に関する生徒満足度80％以上 生徒の希望するインターンシップ受け入れ事業所を確保する。	・将来の進路を想像できる実技や講義を計画的に実施する。 ・実際に生徒が就職した実績のある事業所を開拓する。	A	キャリア教育のアンケート結果では約90％の生徒が働くことの意義・将来の自分の進路について考えることができた。また、2年生5名が8～10日間の長期インターンシップ研修を行い発表を行った。	生徒個人が自分の実際に行く事業所でインターンシップの期間に何を経験したいのか、何を学びたいのかを明確にしてから参加するように事前指導を行う。
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	職員の心身にわたる健康の増進（職員が元気あることで、生徒と共に活気あふれる学校であることを目指す）	勤務時間外労働時間の前年比20％減を目指す。 平均年休消化日数の増加を目指す。	・部活動の休養日を設けることにより、職員・生徒の健康維持、健全育成を図る。 ・事務業務の簡素化、効率化を図り、職員が生徒と向き合える時間を充実させた上で、職員の帰宅時間を早める。 ・職員が心身の不調を感じた時には、随時休養または医療機関受診ができるような職場内の相互関係を築く。	C	・年休消化率は昨年度よりも増加した。 ・勤務時間外労働時間は昨年度よりも増加している。 ・部活動の休養日を設けたことで、全般的には休養日が増加した。 ・考査期間中は研修や会議は設定しないようにしたことで、年休取得の増加を促した。 ・会議資料を工夫し、会議時間の短縮につなげた。	・部内業務分担表や業務進捗管理表等を作成し、業務の平準化を図る。 ・多忙化改善の取り組み例を機会あるごとに職員に通知し、意識改革につなげる。

⑤5S運動（整理　整頓　清潔　清掃　躾）とUDの推進

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	●心の教育	環境整備・美化	5S運動を推進し、安全教育の充実と環境意識を高める。	・企業等の5Sに対する取り組みを調査し、その内容を保健便り等に掲載するなどして、ものづくりに責任をもって取り組もうとする意識の向上を図る。	B	・学校全体で整理、整頓、清掃に努め、安全点検への意識を持つよう生徒へも集会で呼びかけるなどして、校内の環境の改善・維持に取り組んだ。生徒の学校評価アンケートの5S運動に対する評価がさらに向上するよう、今後も5Sに関する情報発信を継続して行う。	・企業の5S運動への取り組みに関する情報を収集し、その情報を生徒へ発信し、5S運動への取り組みへの関心をさらに高める。 生徒会とも連携して私物のごみの持ち帰り処分や、資源物の利活用の心がけの大切さについて継続して呼びかけていく。
		UD思考の考え	UDの視点を取り入れたボランティア活動や新聞発行を通して、生徒の関心と意欲を高める。	・月1回、学期1回の新聞発行をはじめ生徒会活動を通して、震災支援や防災の啓蒙、UDの視点を育む。 ・学期に1回の清掃活動を行い、学校周辺の環境美化に貢献する。	A	今年度も毎月、毎学期の新聞を欠かすことなく発行できた。 今年は学期に一度の清掃だけでなく、佐賀豪雨に被災地支援のためボランティア活動にも参加した。	各新聞発行は職員、生徒の負担がないように発行されなければならない。さらに発行の必要性と価値を浸透させたい。 来年度は、川の掃除など、手の届きづらい場所の掃除を検討している。

⑥高校魅力づくりの推進

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●魅力と活力のある高校づくり	地域と連携して高校の魅力を高める取組を推進することができたか	町内の各団体や学校と連携し、人口減の進む町が抱える様々な問題点を見出し、解決策を研究・実現しながら本校の魅力アップにつなげる。	「有田町まちづくり課」を窓口として各団体と、「有田町教育委員会」を窓口として幼小中学校と連携し、町の抱える様々な問題点を「ものづくり」や「コトづくり」を活かしながら解決策を研究・実現する。また、それらの活動により有田町の魅力を高めながら、本校の魅力や存在意義を高めていく。	B	・11月に開催された「うちやま百貨店」では、デザイン科生徒がポスターやマップのデザインを手がけて貢献した。また、全科で「有工ギャラリー」として授業作品展示やワークショップを行った。教育委員会を通して小・中学生にチラシを配布したところ、子どもたちを含めた多くの家族連れで会場が賑わった。 ・3月に有田町の協力の下、有工ふるさとオープン検定を実施し、町内の方を中心に受検していただいたく計画であったが、感染症拡大予防のため中止した。	・年間を通じた学校行事においても、有田町や商工会議所や観光協会などと連携したものも多く、本教育活動として見直しながら更に魅力アップを目指していかなければならない。 ・新教育課程を踏まえた課題研究として、有田町内でフィールドワークや地域の方とのコミュニケーションを通しながら「ものづくり」で貢献できるチームをつくることを目標とする。 ・全ての取組を「広報ありた」やケーブルテレビなどを通して発信し、知っていただくことが重要だと思われる。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策
教育活動	●健康・体つくり	望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	食育だより等による情報発信の回数を増やし、学校・家庭の連携により、食への意識・関心を高める。	・食育・健康に関する食育だよりの発行（年3回以上） ・将来の食生活の自立に向けた情報を食育講演会や食育だよりを通して発信する。	B	・食育だよりを3回発行し、食への意識・関心を高めることができた。 ・食育講演会の講師の佐賀県からの派遣が今年度は実現できなかった。	・生涯にわたっての健康的な食生活の実践を定着させるため、専門の外部講師による食育講演会を実施するとともに、食育だより等による情報発信を継続して行う。

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

どの評価項目も概ね達成できたと考えるが、なかでも心の教育、進路保障、キャリア教育、高校魅力づくりの推進については、成果がよく現れた。今年度、新設された「高校魅力づくりの推進」では、積極的に地元有田町と連携・協力し、様々な活動を行うことができたが、このことは重点目標の1つである地域連携と特色ある教育の推進にも繋がった。来年度以降も本校の魅力を高めるよう努めたい。一方、学力向上、開かれた学校づくりについては、満足いくものとならなかった。指導体制、方法がマンネリ化しているきらいがあり、教員の考え方や指導と生徒、保護者の意識や行動にも一部ずれが見られた。反省と工夫を怠らず、継続的・計画的指導が必要であると考えるが、そのためにも学校評価をPDCAサイクルに活用し、常に業務改善を行っていきたい。次年度は、創立120周年の節目を迎えるにあたり、今年度の成果を踏まえて、あらゆることが共通理解のもと全校的な取り組みとなるよう意識したい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目